

第3回 長浜市総合教育会議 議事録

I 日 時 平成31年1月15日（火曜日）13時30分～15時00分

II 場 所 長浜市役所 本庁舎3階 特別会議室

III 出席者

【構 成 員】 藤井勇治市長、板山英信教育長、井関真弓教育委員
西橋義仁教育委員、西前智子教育委員
美濃部俊裕教育委員

【事 務 局】 米田教育部長、岩田教育委員会事務局次長、
横尾教育委員会事務局次長、土田教育改革推進室長、
伊藤教育指導課長、今井教育総務課長代理、
古田総合政策部長、横尾総合政策課長、
柴田総合政策課長代理
ほか担当職員（2名）

【議事進行】 古田総合政策部長

【傍 聴 者】 4名

【報道機関】 無し

IV 内 容

1 開 会

2 市長あいさつ

（要旨）

- ・第3回長浜市総合教育会議の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。
- ・新しい年を迎え、委員のみなさまにはよろしく申し上げます。今年は平成最後で元号も変わり、新時代を迎える大きな節目の年であります。
- ・長浜の行政も人口減少や少子高齢化等、大きな課題がありますが、長浜こそということで「挑戦と創造」という大きな旗を掲げまして、長浜市の推進に全力で取り組んでまいりますので、よろしく申し上げます。
- ・みなさんに資料を配布させていただいておりますが、新年改めて読み返しております。ここに教育の本髄があるのではないかと感じております。みなさんお手すきの際にご一読いただいて、教育の現場で活かされたいと思ひ、配布させていただきました。先生冥利だと思ひますが、疲れ果てた児童が鈴木先生との出会いによって見事によみがえって、読むだけで涙が出る実話でございます。先生との出会いがその後、素晴らしい人生にしてくれたというもので、クライマックスはこの教え子が結婚式の

招待状を出し、先生には是非、母親の席に座ってほしいというもので、心震えるお話です。

- ・昨日、成人式が開催されました。滋賀県全体では1万5千人、長浜市では1,375人と発表いただいておりますが、二十歳の成長を祝う式典でした。市長として式辞をさせていただき、平成から新元号に変わる節目の、そして二十歳の大きな出発の年であり、いろいろな辛いことがあるかもしれないが、その時は是非「挑戦と創造」の旗を掲げて乗り切ってほしいと挨拶で伝えました。新成人からは夢と希望を持ち、大人として自覚を持って生きていくという力強い宣誓をしていただきました。会場には早めに行き、新成人と意見交換しましたが、大多数が京都、大阪、名古屋の大学や専門学校に通っているということでした。長浜から通っている人もいましたが、下宿先から帰ってきた人がほとんどでした。東京、大阪、京都、名古屋で就職するという人が多数で、それに限らずパリやニューヨークなど世界で活躍してほしいと伝えました。ふるさと長浜を離れて初めて長浜の良さがわかり、日本を離れて初めて日本の良さがわかるので、是非世界で羽ばたいてほしい、そしてふるさと長浜に帰ってきてほしいと伝えたところ、「帰ってきます！」と返答があった。ふるさと長浜の良さをみんなで外へ出て感じ取ろうということで、まずは送り出す言葉で激励をして帰っておいでね、と伝えました。みんな明るくて、我々よりはるかに魅力のある人間味のある人でしたので、是非活躍してほしいと思います。
- ・今日の総合教育会議は、「子どもの心を耕す日本語教育について」というタイトルで意見交換させていただきます。本日は、滋賀文教短期大学の神谷先生にお越しいただいております。お忙しいところありがとうございます。お世話になります。よろしくお願いいたします。日本語の大切さを我々で是非もう一度認識しようということで、神谷先生のお話を聞きながら、大いに議論したいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

3 講演

講師：滋賀文教短期大学 国文学科長 教授 神谷昌史氏

事務局から、「子どもの心を耕す日本語教育」をテーマ設定した理由及び趣旨について説明した後、滋賀文教短期大学からお越しいただいた神谷先生により、講演を行っていただいた。その後、構成員から出された意見や感想は次のとおり。

4 意見交換

議事

「子どもの心を耕す日本語教育について」

〈意見：教育委員〉

本日の会議のテーマが「子どもの心を耕す日本語教育について」ということで、ここに来るまでこの内容を理解することができませんでした。我々教育委員は、この会議で

話し合った内容が、できるだけ多く学校現場に活かされるということを念頭において参加させていただいているので、「子どもの心を耕す」というのは我が意を得たりというか、私の心に響きましたが、「日本語教育」というのは学校現場にどのように活かせるのか心配しました。日本語教育というのはそもそも対象者が日本語以外の母語を持った人であり、我々からみると外国人です。外国人の子どもの心を耕すというのは、ごく一部には活用できるかもしれませんが、学校全体にそのことを広めていくのは非常に難しいことで疑問点でした。今、先生のお話を聞いて、若干わかったような気がします。今から30年くらい前の話ですが、私の勤務していた学校が大荒れしており、先生への暴力、子どもに対する暴力、動物に対する暴力等がある学校現場でした。当時、校内研究のまとめ役をしていたのですが、2年間「子どもの心を耕す生徒指導」というテーマで取り組みました。先生のお話の中でおっしゃっていたように、家庭環境等が全然違っており、荒い言葉しか知らない生徒が入ってきました。その生徒たちの心に響く、結果的に心を耕すような教材を開発しようということで2年間取り組みました。具体的には、先生自身が感動したことを子どもに伝えられるような教材を探そうというのが1つと、先生の言葉で感動したことを全校集会で話してもらおうというものです。2年間続けまして、具体的な成果はどうであったかということとは中々難しいところですが、少なくとも先生と生徒の距離は若干縮まったのではないかと理解しています。家庭環境や家族関係が言葉を形成していきますし、言葉によってその子の感情が形成されていきます。まさしくその通りで、もう少し具体的にあげますと、当時の高校進学率がいろいろ話題になりました。当時、私が勤めていた学校は進学率が低く、とにかく高校に進学させて、他校の生徒と関わっている言葉を覚えていってもらおうということで、進学率を上げることにかなりの力を注いだことを覚えています。現在は、ほぼ均衡してきまして、全国的にもそうですが従来のような校内暴力が静まってきたというところですが、当時は、教室へ行くのが怖いという先生がたくさんいて、教室へ行く前から腰が引けて正面から生徒にぶつかっていけない先生方もおられました。そういう環境の中で、正しい言葉、感動的な言葉、日本語が持つ美しい言葉を子どもたちにいかに教えていくかということに苦労したのを覚えています。今日の「子どもの心を耕す」ということは非常に大事なことで、30年前のことは間違っていたなという思いで聞かせていただきました。

〈意見：教育委員〉

先ほど先生がお話された乳児期のまだ言葉がわからないときに周りの大人がどのような言葉をかけるかがとても大事だということに共感し、聞かせていただきました。赤ちゃんはお腹にいるときから8か月になると、お母さんの声かお父さんの声かがわかって、お母さんが笑ってる、お母さんが怒ってることがわかるような能力をもって、生まれてからは泣くことしかできませんが、片言が出る1歳までの間に、たくさんの周りの人からどのような言葉をかけられて育っていくか、生まれてきてくれて本当にうれしいとか、大事に思っているという言葉が多くかけられてくることで子どもの心は安定すると思いますし、親に対しての信頼関係ができたり、言葉だけでなく行動も伴っていると

と思いますが、その中で赤ちゃんは育っていくんだと思います。環境面は本当に大事だと思いますし、園や学校に行くわけですが、親の言葉かけはずっと変わらないでいることが理想だと思いますし、一緒に育ててくださっている先生方が多くの子どもたちに対して関わってくださっているわけですが、一人ひとりの子どもに対しても、その子の存在を認める言葉をかけてもらえたら親としてはありがたいと思います。今、長浜市ではありがたいことに、生涯学習文化課さんが事務局となって言葉を大切にするまちづくり推進協議会という活動をさせていただいていますが、長浜市の25のボランティア団体が園や学校、図書館等で子どもたちに絵本を読んだり、紙芝居をしたり、いろんなお話を子どもたちに届けています。25のグループが交流して勉強したり、子どもたちにお話フェスタを開催したりしていますが、先ほどお話のあった美しい日本語等、絵本を通して子どもたちの創造力が豊かになるように、という思いで、私たちも勉強してスキルアップしながら、子どもたちに言葉を届けていきたいと思います。子どもたちは、絵本の内容だけでなく、読み手からもいろいろなメッセージを受け取るとしますので、私自身も発する言葉が優しい言葉であるよう努力していけたらと思っています。

〈意見：教育委員〉

言葉を大切にするまちづくり推進協議会は今年度から西前さんが会長をしてくださっており、リーダーシップをとって活動いただいています。

先生のお話を伺って、言葉は人間形成に繋がるということで改めて勉強させていただきました。ありがとうございます。家庭や地域で子どもたちは暮らしているわけですが、特に生まれたばかりの子どもに対しては一番身近なお母さんの言葉かけが大切だなと改めて思いました。目で見て言葉かけをすることで、子どもは言葉を聞くと同時に安心するんだと思います。だんだん大きくなると、例えば、「宿題！」→「ない」で終わったり、「ご飯！」といった単語でのやりとりが家庭の中でも増えているのではないかと思います。子どもたちが学校での出来事を家でしゃべりたいときであっても、「忙しいから、後で」となかなか聞いてもらえない等、家庭内でも理想とする言葉を中心とした生活はわかりませんが、なかなか日々の生活で厳しい面があるのではないかと思います。そういった子どもたちを学校や園でどのように支えていったらいいのかということをおもうのですが、例えば、読み聞かせもそうですが、言葉だけではなく、その言葉に感動があったりすると、はじめて「耕す」ということになるのではないかと思います。いろんな言葉の中にも物語があったり、感動があったり、自然を見て言葉を文章にしたり、言葉を聞いたり、使ったり、書いたりすることで、言葉を耕すということにつなげていくことも大事だと思います。学校訪問させていただくと、自然を見て等、家庭生活の中のことを詩にしておられる学校や短い俳句の中に感動の言葉を入れたり等、子どもたちはリズムのある日本語を楽しんでいるなと思いました。授業だけでなく、学校生活の中でそういった取組をやっている学校もあり、お忙しい中、先生方には敬意を払いたいと思います。気になるのは、授業と休み時間での言葉づかいの違いです。授業を見せていただくと、低学年の先生が「～さん」と呼びかけていますが、高学年になると、子ども

たちの中にも敬語を使わず、普段話す言葉づかいとなって、身近な人間関係を作っている1つの表れだと思いますが、授業と休み時間の言葉遣い、敬語を使わないと先生はおっしやいましたが、きちんと日本語を使う時間、あるいは解放される時間、そういう時間の使い分けができるということが社会に自立していくわけですので、小さいときからそういう習慣は大事なかなと思いました。また、聴く力ですが、子どもたちは人の目を見る、顔を見て聞くというのも大事な習慣かなと思いました。長浜では、「長浜子どものちかい」で、子どもたちが誓うことを5つ挙げています。「元気に挨拶をします」「名前を呼ばれたら「はい」と返事をします」「ありがとう・ごめんなさいを素直に言います」「困っている人がいたら言葉をかけます」「人の話をしっかり聞きます」この「長浜子どものちかい」というのも、子どもの心を耕す日本語教育の延長上にあるのではないかなと思いました。神谷先生、ありがとうございました。

〈意見：教育委員〉

私も大学で週2、3回、教員を目指す子どもの指導に行っていますが、確かに上手に話す子どもも多いのですが、自分の言葉で話せない子もいると思います。県の教育委員会に行ったときに、当時の国松知事がパナソニックから呼んでこられた齊藤教育長がおられ、海外に20年間滞在されていたのですが、英語は大事だけれども、それよりもどんな人間か、どういう自分の考え方を持っているかが大事で、必要に応じて言葉は大体できるという話を聞いたんですが、先生のお話の中で、家庭と社会経験の中で言葉が身につくということですが、今はインターネット等での言葉が多すぎて生活に結びついていない、つまり自分の思考や社会性というものは言葉が離れてきているように思います。家庭は家庭で子どもとのコミュニケーション、田舎の方で風習が残っているところでも地域の生活改善がでてきた。合理的な形で改革が進んでいるのはいいのですが、今度、地元の総会で提案されると聞いたんですが、私の地元では、お葬式の時に食事をするのは仕方ないけれども、中陰中や年忌法要のときの食事をやめようという案がでてきた。大変なものがでてきたなど。若い世代の人たちが、地域の人と関わるということが面倒だということがあると思いますが、平成から新しい時代が変わるということで年賀状も今年は減ったりいろいろなことがあります。一切変えてしまおうという考え方が出てきて、そこには地域の人との関係、人間関係の希薄化ということもありますが、田舎でこのような案が出てきたことには驚きました。実際そうなるかわかりませんが、長浜ではいろんな文化があって、子どもが歌舞伎をやったり、太鼓をしたり、お宮さんやお寺の行事など、それぞれの地域の行事はものすごく大事であるし、若い人がそういうものに対する意識が薄いことが、すでに悲慘な状況だと思います。教育方面からもそういったことを大事にして保護者にも影響が大きく、社会から学んでいくということを学校からも発信する。そして授業の中では、先ほどおっしゃったアクティブラーニング、最近出てきた言葉ですが、言葉を技術として学ぶのではなく、何かを自分で考えたり、何かをみんなでしたり、関わりながら学習していくことが学校教育では大事だと、改めて先生の話をお聞きしました。言葉の中にある人間性というか、生活に目を向けて、大人、そして学校教員が接

していくことで人を育て、逆に国際化に対応できるのはこういった力を持った子だと感じさせていただきました。

〈神谷先生〉

子どもにきちんと声がけを意識的にしていくことが、内面やさまざまな情操面に影響していくわけですが、1つ大きなことは自己肯定感というのがそれによって生まれるということが大変大きいだろうと考えています。最近の学生という風に十把一絡げで話すのは良くないのですが、多くの若者がそれなりにきちんとできていたり、それなりに頑張っているにも関わらず、非常に自己肯定感が薄かったり、自尊感情を持ちにくい人が多いと感じています。あくまでも印象なのでデータを取っているわけではありませんが、非常にそのように感じています。もう少し自己肯定感が持てれば、もう少し生きやすくなるのに、と感じながら、私たちは学生たちにどのように自己肯定感を持てるようにしていけるのかと考えますが、結局、半ば大人になった状態で接しますので、私たちとしては、それが十分に持ってもらえる前に卒業していったり、ちょっと持てたかなと思っただらガラガラと崩れてしまうことが多くなります。それも言葉で、周りの環境によって幼少期から作り出されるものだと思いますので、そのあたりのことは大事なことだと感じました。自分の言葉で話せないというお話もありましたが、恐らくそれと先ほどお話した3つのタイプの3番目の敢えて敬語を使わないという若者は繋がっているのだと感じます。恐らく彼らは敬語というのは借りてきた言葉、自分の本音や自分の言葉ではないと思っているので、もしかするとそれは正解にされる言葉なのかもしれないけれども、自分の気持ちを自分の言葉で表していないと感じているので、彼らは本音の言葉だと思って、敬語ではない言葉であったり、乱暴な言葉を使っていると感じます。本来、言葉というのは、誰に話すのか、どんなことを話すのかによって変わっていくわけですが、ある種の正しい言葉ということを子どもに教えられると、反対に自分の思っている本当の言葉ではないと感じる子どもも多くいるのかと思います。そういった面をどのようにして教育の中で伝えていくのか大変難しいですが、重要なことと考えております。学生と接していると、私とは違う言葉の環境に身をおいて育ててきて、私とは違って想像がしにくいようなある種の濃密な人間関係を持っております。うちの短大は非常に小さい大学なので、何十人かしかいない中だと、ある意味では非常に濃密で、ある意味ではそんな簡単に切れるんだというくらい希薄なところの両面があって、私としてどう捉えていいかわからないと感じることが多いですが、それを言葉という理屈で考えていくと、彼らは彼らなりにその中でどういう言葉を使っていけばいいかを考えているようなんですが、それと実際の社会に出てきたときの言葉というのは大きなズレがあると考えておりますので、まずは小さいころからきちんとした言葉がけを受けるとか、言葉をきちんと学んでいく中で育てこられるようにどうしていくのか、その後思春期を迎えたり、ある程度大人になってきた段階で、社会の中でその言葉を使ってどう生きていくのか、社会で生きていくための言葉をどのように獲得させていくのか、それがすごく大事だと思います。実際どうすればいいのか、私も日々学生を前にして悩ん

でおります。

〈意見：教育委員〉

それぞれの先生方が言葉の持つ力といいますか、子どもに与える力をどの程度理解を深めておられるのか疑問です。私自身、言葉がすごい力を持っているなと感じたのは退職してから経験しました。退職後、3ヶ月健診の場で、言葉を話せない赤ちゃんに図書館の司書が読み聞かせをしたら、ぐずっていた赤ちゃんの目が輝いたんです。そのときに読み聞かせや言葉の持つ力のすごさを実感したのを覚えています。日頃生徒と話していても、自分の発している言葉が子どもにどの程度の力を与えているのかわかりませんが、赤ちゃんに対する司書の読み聞かせを見て、言葉の持つ力はすごいということを退職してから考えさせてもらった。是非ともあの場面を見てほしいものです。

〈意見：教育委員〉

例えば、この年齢の子にはこの本は難しいかな、この言葉はわからないかなと思って読み聞かせをさせていただいた時でも、子どもは初めて聞く言葉でわからない言葉であろうけれども、前後の話の流れや文脈で多分こうだろうなということを自然と理解してくれるということで、言葉というのは単語ではなくて…言葉が中々見つからないが、単語の言葉ではないんだということを経験させていただきました。最後にもう1つだけお聞きしたいんですが、言葉は生きていると思うんですが、時代の変遷とともに言葉は変わってきて、例えば「食べれる」という「ら」抜き言葉もテレビで聞くことが多いと思いますが、先生はどのように思われますか。

〈神谷先生〉

おっしゃるとおり、言葉は生きていくものなので変化していくものでそれは避けることはできないのは確かだと思います。過去、何百年前も言葉が文法的におかしい使い方をされて、それが今に残るといことにつながりますので、そういう意味では言葉は常に変化しているものだと思います。他方では社会の中において、これがきちんとした言葉ですよという共通理解もあって、それが言いやすいからとか誤用が広まっていくのは、それがどうしようもない間違い、悪いことだとわかりませんが、一定の歯止めも必要なことかと思えます。どのような言葉をどのような場面でも使っているということであれば、言葉はどんどん変化して行って、場合によっては共通で理解できない言葉に変化していきますので、少なくとも公共の場における言葉というのは一定のルール、正しさを守るべきですけれども、とはいえ長い時間をみると歯止めが利かないというのも当然歴史的にはいえることかと思えます。特に学校現場、その他で教えていく中では、これがルールとして共通でみんなが認めていることですよ、というのは教えていけない部分であるとは思いますが。難しい問題ですが。

〈長浜市が検討している日本語教育に関連した取組について紹介〉

〈教育長〉

いろいろなお話を聞かせていただき、ありがとうございました。私が新任で赴任した中学校では、もともと研究に基づいて始まったらしいですが、「こころのノート」という取組がありました。これは何かと言うと、どんなノートでもいいので、自分のこころと言うと大げさですけど、思ったこと、感じたこと、悩んだこと、嬉しかったこと何でもいいので書いてきなさいということで、毎日集めていました。もちろん、全員が出すわけではないですけども、担任もそれに対して1行、2行ではなく、書いてきた量よりも多く書いて返すという取組がありました。これは非常に印象に残っていて、自分が赴任した学校で担任をするたびにそれをやっていたんですけども、今、それだけ自分のこころや思いを文章にできるんだろうかという素朴な疑問としてずっと根強くありました。生徒がやっているメールやLINEに絵文字がありますが、これが駄目だという気もないですが、これを使って単語の羅列で自分の気持ちを、自分の思いを、悔しかったこと、悲しかったこと、嬉しかったことを相手に伝えるということが可能なのだろうか。アクティブラーニングという言葉自体、私はあまり好きではありませんが、主体的で対話的で自主的な深い学びという「ん〜」と思うのですが、アクティブラーニングといった和製英語みたいなものがどんどん子どもたちの文書に入ってきたら、和製英語の単語の羅列しかできないのではないかと心配がありました。対話的って対話が成り立つんだろうかというのも非常に疑問でございまして、やり方だけ真似してこれはアクティブラーニングの手法を使った新しい授業なんですといっても、それを受ける子ども自身はどうなんだろうというのは今後しっかり見ていかないと、とんでもない方向になるのかなという気がします。今から5、6年前になりますが、ある中学校の校長をしていたとき、自転車で帰宅していた女生徒が道路で転んで打ち所が悪く、この辺りの病院ではだめだということで、守山の病院に入院しました。一度お見舞いに行った際、それまでその子とは話したことはなかったのですが、写真を出してきたり、絵本を出してきたりとなかなか帰ることができませんでした。寂しかったんだなという思いで、その子とどんな約束をしたかという、その子は犬が好きで、元気で退院して学校に来ようになったら、校長先生も盲導犬や介助犬の話は好きなので、本を貸してあげることにしました。本を読んで、その子が感想を書いてくるのですが、大学ノート3、4枚にびっちり感想を書いてくるのですが、文章に書いて自分の気持ちを表すということは、幼、小、中で大事なことだと強く思いましたし、皆さんの意見を聞いてつくづくそうだなと思いました。忘れてならないのは、今指導する立場に当たっている20代の先生が必ずしもそういうような状況で、学校で学んできた人たちではないんですよ。その先生たちを何とかしなければならぬんだなと感じさせていただきました。課題はたくさんあるわけですけども、長浜は非常に小学校、中学校、学校図書館も図書室と呼べるような環境になってきたと思います。ここで満足するのではなく、これからも子どもたちに美しい日本語、素晴らしい日本語、言葉の力といったものを、発達段階に応じて、一つ

ひとつ育てていきたいなど、私はそれが学力向上にもつながるし、飛躍しすぎかもしれませんが、いじめといった問題に対しても大きな力を持ってくるのではないかと思います。教育委員のみなさまと共に考えていけたらと思うところです。本日はお忙しい中、神谷先生、どうもありがとうございました。先生のお話の中で、一番共感しましたのは「聴く力」でございます。人の話を聴くというところから会話が成り立つということです。これは現場の先生方にも一つひとつ返していきたいと思います。本日はありがとうございました。

〈市長〉

神谷先生ありがとうございました。自分の思いを相手に正しく伝えるというのは大事な手段ですし、言葉からその人の優しさや怖さ、教養など言葉で全人格を表すものだなと思いましたので、極めて言葉は大事だという思いに尽きます。教育の現場で先生方がいかに言葉の大切さをどのように教えていただけるのか、大いに期待しています。

6 その他

〈事務局〉

本日の議事録については、内容を委員の皆さまに確認いただいたのち、ホームページにて公開します。平成31年度第1回目の総合教育会議については、6月下旬ごろに開催を予定しており、またご案内をさせていただきます。

あわせて、来年度のテーマについて、どんな話をしていきたいか、当初の段階でみなさんのご意見をお伺いする機会を設けたいと思っていますので、改めてご連絡させていただきます。

7 閉会

教育長あいさつ

(要旨)

みなさまありがとうございました。教育委員のみなさん、32年に開校を予定しております虎姫学園の新たな取組については、まだ輪郭しかまとまっておりません。ですが、これは虎姫学園だけでなく、市内の全小中学校でもその取組の成果を波及させていきたいと考えておりますので、さまざまなご見地から、ご助言・ご指導よろしく願います。本日は誠にありがとうございました。

15時00分 閉会